

## コラム 52 — 盧溝橋事件

当時の状況は、日本軍が夜間演習中（軽装備で鉄兜をつけず、空砲で演習）、7日午後10時半ごろ、演習中の第8中隊（中隊長以下秋田の歩兵第17連隊第2中隊が主体）が突然、実弾数発を受けました。中隊長清水大尉が集合ラッパを吹かせると、再び実弾10数発を受けました。このとき、当時の第8中隊の隊員の回想によると、日本軍の演習場（龍王廟）付近にいた中国兵と中国軍の本隊がある盧溝橋との間で、懐中電灯で点滅の合図をしていたことが明らかにされています。

人員点呼したところ、伝令の志村2等兵（東京第1師団管内からの初年兵）がいませんでしたが、志村2等兵は20分後に帰隊し、発見されます。連隊長の牟田口中佐は、一木第3大隊長に現地に急行するよう命じ、8日午前2時、第3大隊と8中隊が合流しました。

そして、8日午前3時25分、再び3発の銃声がし、さらに、8日午前5時半、一斉射撃を受け、第3大隊が応戦を開始しました。応戦終了後、この戦闘での敵兵の遺体を調査した結果、手帳が発見され、その中に直系上官名として、第29軍長・宋哲元、第3大隊長・金振中らの名前が記されており、紛れもなく第29軍の正規兵であることが判明しました。

また、事件発生の翌日の7月8日、日本政府も軍も直ちに不拡大、現地解決の方針を決定しました。中国では、今でも日本側が先に発砲してきたとっておりますが、事実は全く逆です。中国共産党は、7月8日に全国へ向け「7月7日夜10時、日本が攻撃開始、日本侵略者を追い出せ」（これは中国共産党の資料であり、日本軍が翌朝になっても事態をよく把握していないにもかかわらず、時間まで明示されており、電報を発信した当人でないと打てない内容である）と電報を打ちます。さらに、最初の発砲が中国軍側から行われた事実を、第29軍の第3大隊長をしていた金振中の手記から、日本大学教授秦邦彦氏が昭和62年10月に、国際政治学会で発表しました。また、事件直後、北京大学の構内と思われる通信所から、延安の中国共産党軍司令部に宛てて「成功した」という意味の電報が打たれた事実が、元日本軍情報部員（平尾治終戦時少佐）の証言で明らかになりました。（平成6年9月8日付産経朝刊）

そして、国民党軍第29軍副参謀長・張克俠（ちょうこっきょう）は1929（昭和4）年以来の中国共産党秘密黨員であり、さらに、当時中国共産党の副主席であった劉少奇が、東京裁判中に、「盧溝橋事件の仕掛け人は中国共産党で、現地の責任者はこの俺だ」と証拠まで示して、西側記者団に発表しており、東京裁判においても、この劉少奇の発表により、当時戦犯として、巣鴨プリズンに拘置中の河辺大将（当時師団長）と牟田口中将（当時北京市に本部のあった歩兵第1連隊長）は、理由も告げられずに釈放されています。

このときのコミンテルンの秘密指令は、

- 1 局地解決を避け、全面衝突に導け。

- 2 日本に譲歩するものは殺せ。
- 3 国民政府と日本を戦わせよ。
- 4 対日ボイコットを全シナに拡大せよ。

であります。(1939. 10 興亜党政務部コミンテルン対支政策基本資料)

さらに、コミンテルンの戦略は、「日本を泥沼の長期戦に持ち込み、国民党と徹底的に戦わせる。」であり、

- 1 日本をソ連への攻撃からそらせる。
- 2 国民党は日本との勝負にかかわらず、弱体し、共産党政権を樹立できる。
- 3 日本の敗戦により、日本を共産化する。

でありました。

これらの事象から、盧溝橋事件がコミンテルンと中国共産党により仕組まれたものであることは総合的に判断できるといえます。